

裏少女
淫行
二
系
ク
花

〜のどろろち孕ませ動画研究





この同人誌は同人ゲーム「裏雀荘三味々花」をフルカラー同人誌形式に編集したものです。

2010 シャーベットソフト





(もっと強くならなくちゃ……。宮永さんと全国に行くって約束したんだからっ！)

そう決意して飛び込んだ一軒の雀荘。

しかし、この雀荘に入った時には満ちあふれていた自信が、嘘のように溶けてしまった。これで6連敗……。

しかも私1人を狙い撃ちするような打ち方、そしてこの妙な強さは一体……？

(こんなことって……。確率的にもありえません……。……まさか、イカサマ?)

でも自動車だから、積み込みはできないはず。この状況でイカサマができるとしたら。私は思い切って上家の男の手首を掴んだ。ニギっていた牌がこぼれ落ちる。

「やっばり。自分が有利になるように、牌をすり替えていたんですね」

「ちっ……」

「では、これまでの試合は無効ということになりますね」

「お嬢ちゃん、知らないのかい？この裏世界じゃイカサマはやった方よりやられる方が悪いんだぜ……」

「なっ！ 私は認めませんよ、そんな……。不正を正当化するだなんて」

「悪いね。ここにはこのルールつてもものがあるんだよ」

「おうおう嬢ちゃん！ 負け分きっちり耳揃えて払ってもらおうじゃねエか！」

突然スゴみ出す男たち。

これほどの大金、高校生の小遣いで払えるわけがない。

「払えません！ こんなめちゃくちゃなルール、麻雀でもなんでもありませんから！」

「だったら仕方ないね。フフフ……。金が払えないなら、身体で払ってもらおうか！」

——パチン！

指を鳴らすと、奥から腹の出た中年の男たちが現れ、上半身裸で私に近づいてくる。

「いや、来ないで……。こっちに来ないでください……」

「負け分はきっちり返してもらおうぜ。さあ、のどかちゃん。ちゃんとお客様に喜んでもらうんだよ」

「お……お客様？」

「まさか麻雀雑誌にも載ってるほどの有名JKに、あんなことや、こんなことしてもらえるなんてな」

「客ってまさか、私がこの人たちの相手を……？」

麻雀で……。のはず、ありませんね……」

「クッククック、さすがに頭がいいじゃないか」

「う……。うそ……。無理です、絶対無理！ ……どうして、どうしてこんなことに……。助けて……。宮永さん……。優希……。部長おお……！」

「助けを呼んでも誰もこないぜ、こんな裏世界の雀荘にはない！」

すべてを悟った瞬間、絶望とともに目の前が真っ暗になっていった。



「い、いやあああああつ!!」
「おほほ、見た目と同じですごい弾力だね」
「やめて、そんな手で触らないでください! いや、離して……離してくださいいいっ!!」

制服の中に隠れて圧迫されていた乳房が、ぼろりと弾けて外気に触れる。

「うほっ、すげえ弾力だぜ!」

「はあ、ああ……だめ……そこは触っちゃ……あう、あつ、はあつ」

「いや、離して……あは、あああつ、おっぱいはだめです……そこは……んんんっ!!」

「ここは何? もしかして感じちゃうとか?」

「感じてなんか……ん……んんう……ない……」

口ではそう言いながらも、触れられてもいない乳首が何だか切なくなつて……。

「あう、あ、ああ……はう……んぐ……う、ううっ……」

「切なそうな声出しちゃつて、もしかして乳首もいじってほしいのかな?」

ぬるつとした舌が、突起を包み啜え込んでいく。
「だめっ、吸っちゃ……やん、あつ、あんっ、んう、うああ、はあああ!!」

頭がぼーっとして、何か熱いのが背筋を駆け上ってくる。
それと同時にアソコの奥が痺れてきて……。

「ひやあああつ、何かきちゃうっ、おっぱいで、アソコの奥うっ、ん、ふううんっ!!」
「あああ、なんていやらしいコだ。胸だけでイッちゃうのかよ。」

「はいんだよ、そのままイッても、何度でもイッちゃうっ!!」
「はあつ、んあああつ! 宮永さん、私っ、あん、んう、ふわあああつ、
あ、あふああああああああああああああつ!!!!」

生まれて初めての感覚だった。
一瞬、ふわつとなったかと思つたら、続けてものすごい衝撃が迫ってきて……。

「はあ、はあ、はあ……これがイクツて、ことなんですか……
すごい、こんなのって……あああ……」

悔しくて、涙が溢れてくる。でも今は泣けない。
ここで弱みを見せたら、また男たちを調子づかせてしまう。
だがそんな決意を打ち砕くように、男が穿いていたズボンを脱ぎ捨てて言った。

「さあ、今度は俺も気持ちよくさせてくれよ……なっ!!」
「いつ、いやああああああああああああああああああああああつ!!!!」



「ひゃあつ、あんつ、だめって言ったのに、またあああつ、……入って、擦れてっ……びったりしてて……さっきのと全然ちがいます！」
「目隠ししてるから触ればっちり感じるだろ？ やっぱ本物はいいいだろ？
ああ、もう膣内はぐちよぐちよじゃねえか！」

いやらしい水音がくちゆくちゆと鳴り響き、肉と肉とが擦れ合い、
見えなくてもその音を聞くだけで、私の心をためにしてしまう。

「もうだめ、おかしくなっちゃいますっ！ あん、ああつ、
き、気持ちよくなり過ぎて……感覚がなくなつて、うううううっ！」

「いいよ、もっと気持ちよくなつて。そんなのどかちゃんを俺たちはもっと見たいんだ」
——ズブリ。

「あああんつ、またあああつ……！」

トドメを刺すように、また注射を打ってくる。

「いや、こんなに打たれたらっ……本当にだめになっちゃいます！
狂っちゃう、狂っちゃうううう！！ ——ひゃっ！」

いきなり視界が明るくなった。

そして目の前には、手にビデオカメラを持った男が、じつとこっちを映していた。

「え、やだっ……！ それって、撮ってるの！？」

「安心して。今までの様子はちゃんとビデオに収めておいてあげたから」

男たちはさらに興奮を高めたように、ぐりぐりと奥まで腰を打ち付けて
子宮口を小突かれる。

「うぐっ……出っ……るっ……！」

「やだっ、またピクって！ あ、あ、あ、あつ、くる、きちゃいます！

私も感じてっ、イクッ、イキます、イッちゃいますうう！

気持ちいいっ！ きもひいいいい！！！！」

ドビュッ！ ドビュドビュッ！！ ビュクッ、ビュル！！

「あああああゝゝ！ また出されてるうううっ！ ドロドロの精液がつ、んううっ」

身体は快感に酔いしれてびくびくと震えているが、心は絶望の淵に落とされている。
膣内に出されたことも、そして、そのことに対して大声で気持ちいいと
叫んでしまった自分自身にも……。



「はあ、はあ、だめです……こんなところで、はあああぁぁぁ！」
「おっと、人がこんなにいるっていうのに、そんな声出しちゃっていいのかな？」
「だって、それはあなたたちが、あん、あああつ、だめです、勝手に声っ、うううっ！」
「俺たちはただきつかけを与えてやったに過ぎない。今こうやってパイプで感じてるこの姿こそが、本当の原村和なんだよ」

「はあ、ああ、これが本当の、あああつ、私なんですわね……」
「確かめてみるか？ このまま止めちゃったら、お前はどうなっちゃうだろうな」
「それだけは……、認めますから……こんな身体になっちゃったのは、全部私がエッチだからで……。だから抜かないでください、いっぱいご褒美ください」

学校からの帰りの電車の中で原村さんを見つけた。
最近ずっと休んでいたけど、体調でも崩していたのかな？ 顔色も悪くて苦しそうだし、なんとか人ごみをかきわけ、近づこうとするも、通勤ラッシュの車内はぎゅうぎゅう詰めで、その場から一步も動くことができなかった。

「いちばん感じちゃうところ……ん……ん……そこっ……そんなとこばかり、ブルブルしたら……みんなの前で……あう、んんっ……」

「いいぞ、好きだけイッて。それがお前の望みなんだろ？」
「そうですけど、あああ、こんな場所で……公衆の面前で、やっぱり恥ずかしいです」

何かを必死に耐えているみたいだった。
彼女の背後にびったりと張り付くように、男が立っていて、その手は原村さんのスカートの中に入っていて……。

（間違いないよ。原村さん、痴漢に遭ってるんだ！）

ここからでも微かに聞こえてくる、原村さんの吐息……。

「あう、ああ、あつ、ああつ、いい、いいよお……だめなのに、感じちゃう……。またすごいきちやいます」

「でも本物のチンポの方が好きなんだろ？」

「あ、当たり前じゃないですか。あの日から全然、ここに挿れてくれないんですもの。……焦らしてるんですか？ もう私、欲しくて欲しくて……」

「ククク……おねだりか。さすがにもう我慢できなくなってるようだな。いいだろう、次の駅で雀荘でしたとき以上のものをお見舞いしてやる」

男の口が確かにそう動いたのを、私は見逃さなかった。

（……え？ 雀荘？ この辺りにある雀荘といたら、たしか……。）

などと考えていたら、ドアが開き、原村さんと男が一緒になって降りていってしまふ。急いであとを追おうとするも、人混みに邪魔されて、結局は見失ってしまった。



「は、原村さん……おかしいよ。もうこんなのもう見られないよ……。今すぐ原村さんを返してください！」
 「ああ、返してあげるよ。ただし、この対局にお嬢ちゃんが勝ったらね。でも君が負けた場合は……フッフ、楽しみだねえ」

原村さんを捜し回って入った一軒の雀荘。
 ようやく見つけたと思ったら、そこには信じられない光景が広がっていた。

「宮永さんっ、あはっ、あああっ！」

気をつけてください、あの人たちはグルになって……はあああああっ！」

「お前は余計なこと言わなくていいんだよ」

「うっ、ううっ……だめっ！ 力が入らない……急に、奥が痺れてきて、

はあ、あああっ、この感じは、またああっ！」

「ようやく今朝打った薬が効いてきたようだな」

「はあ、あああっ、それって、また私が……！」

「友達の前でイッチまえ。それが最高の媚薬となってまたお前を成長させていくからよ」

「いやですっ！ 宮永さんの前で、あんなっ……あはっ、あああっ、んあああっ！」

負けるわけにはいかない。勝って原村さんを助けないと……！

「よそ見してていいのかい？ 人の心配してる間にほら。ロン、満貫で8000点」

「そ、そんな……」

「これでお嬢ちゃんは飛んだね」

点棒があつという間に尽きてしまった。それはこの対局での敗北を意味していた。

「どうやら向こうも決着がついたみたいだな」

「あ、あつ、宮永さんっ……あん、んぐっ……んっ……ごめんなさい……。私も、もう……あ、んあああ……」

膺全体が痺れてきて、もう抵抗する力もなくなっていた。

「やだ、なんですか、この感じは……今までとちがいます。

あ、あつ、はっ、ビリビリってきて、なにか出てきそうですっ！」

「さあ、イクぞ！ ここからじゃ丸見えだから、たっぶり押んでもらえ！」

「いやっ、いやいやいやっ、あ、あああつ、すごいくる、出ちゃうっ！」

い、いやあああああああああああ……っ……！

ドビュ、ドビュッ、ピュル！！ ドクドクッ、ドプッ！

「宮永さん……あああ……ごめんなさい……私のせいで、ごめんなさい……」



「い、痛いよっ、あああ……痛いよ原村さんっ！ いや、いやあああッ！」
 「ごめんなさい宮永さん、私のせいで、ごめんなさい……」

あの時の痛さは身をもって体験している。
 だから宮永さんの気持ちは文字通り、痛いほど伝わってくる。

「らめっ……まだアソコのなか、ヒリヒリして……だめっ、もっと優しく……
 やっ、いやっ……強くしないで、あうっ、あ、ああっ、んあああああッ！」

「だったら痛いのが消えちゃう薬があるんだけど、試してみるかい？」

「だめよ！ そんなことしたら宮永さんもっ……！」
 「でもいいのか？ 大事なお友達がこのまま痛い思いをしてても」

「だったら私が気持ちよくさせてあげます……それがせめてもの償いだから……」
 「あうっ、やだっ……そんなとこ舐めちゃだめだよ……そこは汚いから……」

「ちゅる、んちゅ……でもここ、気持ちいいでしょ？」
 「はあ、ああ、よくわからないけど、すごい……んっ！」

「もつといっぱい舐めてあげますね……その痛みが快感に変わるように……」
 「あああッ、ピリッてきちゃうよ……原村さんどうしよう……」

私、どうしちゃったの……、はあ、ああ、何だか熱くなって……ん……んっ」
 赤い血に混じって、徐々に愛液も漏れ出してきていた。

「あんっ、ふうううっ……やっ……痛いの、気持ちいいよ……なんなのこれ……、
 あ、んっ、さつきから、ジンジンしてきてっ……！」

「それがイクってことだよ、覚えておけ。これからは毎日味わうことになるんだからな」
 「イクって、何ですか……ふわあッ、ああッ、怖いよ、何か来る……」

原村さんっ、助けて、また奥からきちゃってるよ！」
 「大丈夫です、それはすごく気持ちいいものだから……怖くなんてありませんから」

「本当につ？ イクよ、イツちゃうよっ！ アソコがもう、いうこときいてくれなくて！
 あ、あッ、んああッ、ふわあああああああッ！！」

ドビュッ！ ドビュッ！ ビュルッ！

「あああッ、んぐっ……んっ、んあああ……あ、うあああああッ……」
 さつきからこれ……私の膣内に入ってきてる熱いのって、これってえ……！」

「なんだ、本物の精液は見たことないのか？ 危険じゃないことを祈るばかりだな」
 「う、うそ……うそだ……うそだよ……う、うう……ふえええええ……」

「おっと、泣いてる暇なんてないんだぞ。まだまだお楽しみはこれからだからな」
 ——チクッ！

「……っ！ 痛っ！」

「……そんな……宮永さんまで」

とうとう注射を打たれてしまった。

これで宮永さんも、元の世界には戻れなくなってしまおう。



「ふああつ、はああつ、さつきと全然ちがうよおっ！
膣内で擦れて、はああつ、本当にさつきと同じオチンチンなのお！？」

すでに痛みは消え、快感だけを感じているようだ。
あの媚薬は痛みを麻痺させるばかりか、それを快感へと変換するのだ。

「うああつ、ああつ、原村さんっ、んああつ、すごいよお、これえ……」

「宮永さん、やつ、そんなに動いたら、乳首が当たって、私もきちやいますからっ！」

「なんだか原村さんともエッチしてるみたいで、すごく興奮してきちやう」

「ああ、宮永さんもなんだ……じつは私もなんです」

こうしていると宮永さんと、いけないことしてるみたいで……ああんっ！
「うううっ、オマンコの音、聞かれちゃってるよ……恥ずかしい音、あん、はあつ、

でも止まらないの、お汁でいっぱいだから、ひやあつ、はあああつ！」

「お前、本当にさつきまで処女だったのか？ 吸いついて離れないじゃないか」
「どうしよう、原村さんっ！ おかしくなっちゃう、もう私じゃ止められないよ！」

「大丈夫です、そのまま身を任せて。そしたら最後にはきつと……」

「きつとなに？ なんなの？ なにがどうなっちゃうの！？」
「そんなの決まってるだろ。遠慮しないで全部膣内で受け止めるよ！」

「あ、ああ、ふあああつ……やっぱりそうなんだ、くるよ、きちやうよ！
どうしよう原村さん、またオマンコに出されちゃうよお！」

そうは言われても、私もそれどころではなかった。
宮永さんと抱き合ってるだけでもどうにかなりそうなのに……、

こんな近くで、そんなあられもない姿を見せられたら……、

「だめっ、私もきちやいそうです、おっぱいだけでイッちゃいそうですっ！」

「え？ うそ、原村さんもっ！？」
「はい、私のおっぱい敏感だから、オチンチンじゃなくてもすぐに、

あ、はあ、くるっ、私もイッちゃいますっ！」
「いいよ、イこう！ どこまでも一緒にっ、んあああつ、原村さん、原村さああんっ！」

「宮永さん、イク、イッちゃいます！ おっぱいでオマンコ、イクううううううっ！」

ドピュッ！ ドピュッ！！ ドピュッ！！ ドブ、ドプッ！！

「はあああああつ、あんっ、あああああああああああ……！！
膣内にドピュドピュ出されてるよおおくっ！！」

「あはっ、ん……んんっ……んぐっ、ふう、あああ……ふうううんっ……」

抱き合ったまま、2人してイッてしまった。

たぶん、こういうことが幸せってことなんだと思う。

大好きな人と、大好きなオチンチンに囲まれて……奴隷でもなんでもいい。
こんな毎日が続いてくれれば、他にはもう何もいらぬ。



「赤ちゃんにまで届いてきちゃう、パパの精子が。びっくりして、起きちゃうかも」

「いいじゃないか。パパとママが愛し合っているとこを見てもらえばさ」

「わ、私もご主人様の家族なんだからっ！ 原村さんだけなんてズルイですよ！」

「ああ、わかってるよ。咲も大事な家族の一員だ」

「だってさ。原村さん、聞いた？」

「もちろんですよ、宮永さんは私にとっても、ご主人様と同じくらい大好きだから」

「うれしい……幸せだよお！」

「宮永さん……ん……ちゅっ♪」

「あんっ♪」

気がついたら唇を押しつけていた。

宮永さんと家族になれたのがうれしくて、こうすることでした。

その気持ちを表現することができなかつたから。

「好きよ、宮永さん……あう……ちゅる……」

思えばこれが、私にとって初めてのキスだった。

つまりはファーストキスで、まさかこんな形で奪われちゃうなんて思いもしなかつた。

(でも嬉しい。初めてのキスが大好きな人とだなんて……)

快感とはまた別の興奮が押し寄せてくる。

胸の奥につかえていたものが一気に開放され、代わりにポカポカとした温かい感情が

その隙間に入り込んでくる。

一緒に麻雀で全国に行こうって、その約束は果たせなかつたけど……。

こうしていつまでも一緒に居られるなら、それだけでもう十分だ。

(宮永さんとならどこまでも……)

「ああっ……愛されてるの、伝わってくる……心も身体も、みんな繋がってるって……。

家族なんだって……あ、ああっ、こんな気持ち久しぶりだよ」

そう言って笑う宮永さんの目には、うつすらと涙が浮かんでいた。

「お母さんとお姉ちゃんがいた、あの時と同じっ、これからは家族みんなで……、

仲良く暮らしていこうね……」

「はい……もちろんです……」

生まれてくるこの子たちと、いつまでも一緒に……。



復讐のピカレスク美少女ADV
5月リリース予定

リザイン

RESIGN



↑『リザイン』よろしくです!
そろそろ最後の仕上げ中!(ここが大事)

裏雀荘二咲ヶ花

のどっち孕ませ動画研究
同人誌版

シャーベットソフト / 代表 雪白イマ
URL - <http://www.sherbetsoft.com/>

あとがき

のどっち可愛いですよ〜。咲もカワユス、二人がめちゃくちゃにされたら
さぞエロ可愛かろう、と思っけていてもたってもいられず企画した作品の同人誌版です。

駅のトイレで輪姦、とかパニー服で調教、とか、やりたいシチュを堪能しましたですよ。あと和の魅力は敬語っぽい口調にもありますよね! ね!

印刷・コーシン出版

禁無断転載・複製・複写
2010/4/29 発行

SBT-105